



内川小百合

わが家の猫殿が、早朝からさわがしい。「起きてよ！来てよ！」といわんばかりに、入れ代わり立ち替わり呼びにくる。

「はいはい。起きますよ」と根負けして、階下に行く。

猫殿がそろって見上げるところを見ると、なんと洗面所の天井に異変が！丸型蛍光灯のカバー越しに、12枚もあるムカデが元氣よく動いているのが見える。何十本もある足が、細かく動き、その影は、あまり気持ちの良いものではない。

まあ、猫殿は、なんと賢いことか、この状況を必死に伝えたかったのだ。

「さて、どうするかなあ」と考える。だって、こんな

に足がたくさんある虫は、どうも気味が悪い。もし、

取り損なつて、足元から這い上がってきたら、どうしよう…。などと思いつつ、

殺虫剤を手にする。猫殿も「お母さんは、どうするのかしら」というような顔で見上げてい

る。決心して、蛍光灯カバーを外し、虫めがけてスプレー！

このムカデは、小さく丸まり、動かなくなった。猫殿も、安心

したのか、また好き勝手に散らばっていた。

小さな事件ではあるが、猫殿の通報は、的を射ていた。ムカ

デだって、どこから侵入したのだから、床を這い、壁を伝

い、天井にたどり着いたのだ。もし、寝室にまで来て這いまわ

っていたら、と思うと「ぞっ！」とする。小さな異変も、こんな

猫の通報

小さな異変を早く皆に周知して、大事に至らないようにする「ヒヤリ・ハット」という言葉がある。わが家の小さな事件も、ムカデに刺される危険性を、事前に防いだことになる。大きな事故が1件起こればその背景には小さな事件が20件、ヒヤリ・ハットが300件起きている「1対29対300」

ハインリッヒの法則というのがあるらしい。未然に小さな事件に対処することが、本当に必要なのだ。

どんな職場でも危険な状況はゼロではない。職員や社員の方たちが、こまめに報告し、対処していくことで、大きな危険を防ぐ。日々のコミュニケーションが大切だ。外国籍の社員が増えている現状で、もし「伝わっているつもり」が「誤解したまま」という食い違いが発生すると、いずれは大事件の恐れもある。

日本人は、自然に多くの単語を身につけてきた。それは、漢語だったり、和語だったり、外来語だったりする。難しい言い回しもあれば、同じことをやさしくわかりやすく話すこともできる。

ヒヤリ・ハットの場面では、お互いに、わかりやすい「やさしい日本語」で話してほしいものだ。

(うちかわ・さゆり、丸の内ビジネス専門学校長■松本市)